

地域における子どもの育ちとおとなの役割

——地域子ども教室「夢工房」の事例をもとに——

* 梨 本 雄太郎・** 池 川 尚 美

Children's Growth and Adults' Facilitation in the Local Community : A Case Study of “Yume-Kobo (Dream Studio)” in Sendai City

NASHIMOTO Yutaro and IKEGAWA Naomi

子どもの「育ち」を考えるにあたって、学校や家庭などに囲い込まれない開かれた空間としての地域がどのような意義を持つのかに着目する。子どももおとなも含めたさまざまな人が生活を営み、多種多様な情報や文化が飛び交う場としての地域が、子どもの「育ち」を豊かにする。また、そのような子どもの「育ち」は周囲のおとなや地域に活力を与え、地域をより魅力的なものに変えてゆく可能性を含んでいる。

本稿では、そのような取り組みの事例として仙台市における地域子ども教室「夢工房」の活動を取りあげ、検討する。いくつかの局面に焦点をあてて活動の経緯をたどってみる中から、この活動が含む豊かな可能性と課題とを明らかにする。

I

1 地域子ども教室「夢工房」の概要

「夢工房」は、文部科学省による地域子ども教室推進事業として、夢工房実行委員会が運営する地域子ども教室である。仙台市教育委員会に事務局をおく仙台市地域教育力再生プラン運営協議会から再委託を受けている。地域子ども教室推進事業は平成16～18年度の緊急3カ年計画事業であるが、「夢工房」は1年遅れて平成17年4月から活動を開始している。

開設場所は、仙台市立東六番丁小学校（通称「東六小学校」）の低学年用の図書室である。この低学年用図書室は、3階にある図書室とは別に低学年向けに設けられている。平成16年初頭までは校舎1階の最も奥

に位置していたが、不審者対策の意味合いから多くの目が届く場所ということで、校庭に面した昇降口脇の教室に移設された。月曜から金曜までの各日、低学年の授業終了時から学校の定める最終下校時刻までが、「夢工房」の活動時間である。なお、東六番丁小学校では、学校図書室を活かした放課後の子どもの居場所作りとして、平成15年より学校図書室等開放事業¹⁾を先行実施している。両事業をあわせると、月曜から土曜までの週6日間の開設となる。

東六番丁小学校は仙台駅の北約600mに位置し、児童数は約370名。少子化のほか、仙台市中心部の空洞化に伴い児童数は徐々に減っていたが、平成13年の児童館開館を契機に児童数が増え、ここ数年は横ばいから微増の状態が続いている。学校は国道と東照宮の門前町として栄えた商店街に続く県道の交差点にある。

* 学校教育講座

** 宮城教育大学研究生

1) 仙台市教育委員会による学校施設の開放事業のひとつ。仙台市立の小学校の図書室や特別教室等の施設を地域に開放し、読書の機会を提供するとともに子どもの居場所を拡大し、地域の生涯学習の場として活用することを趣旨とする。教育委員会が実施校ごとに設置する推進委員会に管理・運営を委託して行う。平成15年度より実施され、平成18年度現在21校で実施。

商店街沿いには学生・単身者用マンション、その周辺にはファミリー型マンションが増えているが、学区の大半は高齢化の進む古い住宅地である。多くの住民が校門前を通過して通勤通学をしており、転入者にも学校の存在はよく知られている。

このように通勤通学には至便な土地柄であるが、子育て環境としては充分ではない。学区内に公立および認可保育所が存在しないことに加え、2園あった幼稚園は移転あるいは廃園し、現在学区内に幼稚園はない。また、児童遊園は少ない上、不審者の出没など防犯上の課題を抱えている。このような状況を憂える母親たちが起こした学童保育・児童館づくり運動に、空洞化を心配する地元商店主や町内会などが協力して、平成13年には児童館が学校敷地内に開設された。

「夢工房」の運営に当たる実行委員は12名で、学校図書室等開故事業の実行委員とおおむね同じメンバーがあたる。地域住民9名には、在校生および卒業生の保護者と主任児童委員が含まれており、ほかに学校の教職員3名(教頭、嘱託社会教育主事²⁾、図書担当教諭)とで実行委員会が構成されている。実質的な管理運営は地域住民側の実行委員が担っている。実行委員会は月1回の定例会を開き、活動計画や活動の見直しを行うほか、実行委員・スタッフ・ボランティア³⁾のための研修の実施、スタッフやボランティアの募集と活動日の調整、情報交換のための日誌・メーリングリストの管理、運営費の管理執行、広報活動、学校との連絡調整などを行っている。

日常の活動に携わるスタッフは基本的に3名体制で、随時ボランティアが加わる。スタッフは安全管理に留意し、準備から片付け、他の曜日スタッフへの連絡など、活動に見通しと責任を持ってあたる。スタッフの1名は地域在住の年長者で「地域スタッフ」と呼び、主として全体の安全管理にあたる。残り2名は学生スタッフで、子どもの活動支援にあたる。地域スタッフには、文庫活動や児童館ボランティアの経験者、主任児童委員、虐待防止電話相談員、退職教員・児童厚生員が入っている。

学生のスタッフとボランティアは、仙台市内の各大学を通して募集、委員が面接後決定し、学校に紹介した上で登録している。また、東六番丁小学校では仙台市教委の学校支援ボランティア事業として多くの学生が指導補助や子どもの遊びに関わっており、その学生の一部が「夢工房」の活動に加わった。逆に「夢工房」の学生たちも希望して学校支援ボランティアや市教委教育相談課担当の「にこにこボランティア」に採用してもらうなど、授業中と放課後の両方にわたって子どもとかかわっている学生も多い。

スタッフとボランティアの登録者は25名を超え、曜日ごとに入れ替わって活動を行う。各自の活動の反省や迷い・悩みなどを日誌に書くことで、情報や意識の共有化をはかっている。また、緊急性の高い内容や周知徹底したい事柄がある場合には、メーリングリストの使用で補っている。

「夢工房」での活動のねらいは、①子ども主体の活動を進める中で、自分の活動への満足感や達成感を味わうこと、②同年齢・異年齢の子どもどうしや地域のおとな、学生ボランティアとの関係作りにより、人と交流することの心地よさや信頼感を醸成することである。子どもたちが自分の意思で参加し、自分のやりたいことをする自由活動を基本とするため、登録制はとらず、特定の行事以外は申し込みの手続きも必要としない。ランドセルを持って来ることとその日の参加者名簿の記入さえすれば、来る時間も帰る時間も自由、他人に迷惑さえかけなければ好きなことをして過ごすことができる。

また、子どもたちの自由な活動から芽生えた企画を形にする支援も行っている。課外活動のスクールバンドの子どもたちが結成した任意バンド「チェリーブロッサムズ」のコンサートの支援、「THE☆弁当酢⁴⁾(べんとうず)」という子どもたちの食育グループの活動がそれに当たる。「THE☆弁当酢」の活動は、宮城学院の平本福子研究室と共同で行っている。年に数回、「夢工房」主催の行事も実施している。そのほか、高学年の子どもたちは特別活動や教科のグループ学習な

2) 仙台市教育委員会では、社会教育主事の資格を有している教員・教頭に、社会教育主事を委嘱する「嘱託社会教育主事」の制度をもっている。嘱託社会教育主事は、学校教育に携わりながら青少年を中心とした社会教育事業にも関わることで、学社連携・融合の推進にも貢献している。

3) ここでいう「スタッフ」は、「平成17年度『地域子ども教室推進事業』実施について(運用指針)」における「指導員」、「平成18年度『地域子ども教室推進事業』及び『子ども待機スペース交流活動推進事業』の実施について(運用指針)」における「安全管理員」を指す。ただし、以下の記述ではボランティアと区別せず、両者をあわせて「スタッフ」と表記している箇所もある。

どの調べもの・話し合いの場所としても活用しており、状況や要請に応じてその援助も行っている。

2 「夢工房」の活動に至る経緯

東六番丁小学校の図書室等開放事業は、平成15年度に開始された。当時のPTA会長が、前年度市内の小中学校でモデル事業として始まった図書室等開放事業を知り、学校に強く働きかけて実現した。委員は全員在校生の保護者で、PTA本部役員として賛同した者、子どもの読書活動を推進したい者、児童館づくり運動の母体として平成9年に立上げ、その後も地域の子どもにかかわる活動をしている「東六の子どもの放課後を考える会」のメンバーなどであった。筆者は「東六の子どもの放課後を考える会」のメンバーとして誘われ、加わった。開放指導員も保護者から募った。

委員が週末に学校の鍵を預かり開放することから、開設前は校舎管理のあり方が懸念されたが、活動が軌道に乗ると活動のあり方が問題になってきた。読書活動の推進のみを目的に活動に加わった委員は、確かにイベントには人が集まるが、図書館として静かな環境の下で本を読ませてあげたい、イベントをするのは抵抗がある、という意見であった。一方、学校施設開放を強く意識する委員は、多彩なイベントで幅広い活動にしたいと考えていた。「東六の子どもの放課後を考える会」の活動の経験から、子どもの本離れが進んでいる現状では本の魅力だけでは子どもは来ない、まずは子どもに土曜日の図書室に足を運んでもらうことだ、という主張もされた。結局2年目は、「図書室らしい活動を」ということで大きな行事はしなかったが、そのうち利用者0という日さえ出てきた。イベントに積極的でなかった委員も「最初は子どもたちには静かに本を読んでもらいたいし、そういう場を作りたいと思っていたけれど、それでは子どもは来ないということが分かった。」と定例会で話すようになった。大人の側の理屈から、子ども本位の活動へと方向が変わっていった。

その頃、同じ土曜の体育館の自由活動開放では利用が急増していた。同じ指導員が毎回担当するようになり、活動内容を継続させるようになってからだという。お互いの顔も分かるので、「○○ちゃんまた来たね。」「また今度やろうね。」と双方が楽しい様子で、友達

が友達を呼ぶ形で活動は盛況だという。こちらの活動にも参加している委員の話から、「指導員は多くの人が入れ替わりやるよりも同じ人がやる方が良い。」「顔が分かることが必要。」と、子どもとの関係づくりの重要性に気づいた。子どもたちと顔のつながる関係を尊重しながら、子ども自身の判断で参加できる活動にしたい、という思いが蓄積していった。平日の活動であれば子どもたち自身が活動の様子を見て自分の意思で判断して参加できるし、開放図書も毎日放課後に借りることができるようになる。平日に顔がつながれば、きっと同じ活動として土曜日の利用も増えるだろうと考え、図書室等開放事業を平日に拡大する形で「地域子ども教室」の活動を開始することに決めた。

3 「夢工房」のあゆみを見る居場所の意義

(1) 開設当初の子どもたち

平成17年4月27日、地域子ども教室「夢工房」の活動は、特別なセレモニーもなく静かに始まった。当初の学生スタッフは知り合いの学生たちで、高校時代に学童保育や障がい児の放課後活動のボランティアをしたり、中高生の居場所づくりの経験を持っていたりという実績を頼りにお願いした。児童館づくり運動以来の地域活動で、学生ともつながりがあったことが、スムーズな開始に結びついたのである。その後、徐々に各大学で募集した学生が入ってきた。

開設翌々日、PTA総会・懇談会に合わせて開催した映画会が実質的なオープニングイベントとなった。そもそもこの企画は、PTA総会の間に子どもを預かってほしいという保護者の要望を受け、学校が学生ボランティアで対応すべく計画したものであった。学校は数名の参加だろうと予測していたようだが、参加者はかなり多くなるだろうと予想したため、結局「夢工房」で引き受けることにした。子どもに留守番をさせたことのない家庭では懇談会の間の預け先に困っており、ちょうど児童館の休館日であったことも考慮したのである。当日は、狭い教室に全校児童の1/3弱にあたる114名が集まり、すし詰め状態の中ほとんどの子が最後まで見ていた。途中何人か保護者が覗きに来たが、映画会の様子を見て総会や懇談会に戻って行った。

「夢工房」の本格的な活動は5月の連休明けであっ

た。学生スタッフは「夢工房」以前からの顔見知りのため、スタッフどうし自然と愛称で呼んでいた。すると子どもたちはすぐその愛称で呼び始めた。「ちゃぼは?」「たまちゃん今日はいないの?」1週間もしないうちに、そう言って来る子がでてきた。しかし、学生以外のおとなのことは、「先生」と呼ぶことが多かった。「先生じゃないよ」「じゃあ、何て呼ぶの?」そこで全員愛称で呼ぶことにし、名札も愛称に氏名を併記する形にした。しかし、地域スタッフはもちろん学生でも自分の愛称をもたないスタッフは少なくなかった。「子どもたちにつけてもらえば?」「じゃあ、誰か決めて?」「Kさんはなんていう名前なの?」「ひろみ」「じゃあ、ひろみん」子どもたちがあつという間にするこの命名こそが、子どもとおとなの距離を縮めるきっかけになったと思われる。すぐにスタッフを愛称で呼ぶ子もいれば、なかなか口に出せない子もいる。いつまでも「先生」と呼んでしまう子もいたが、自然と愛称が定着して行き、おとなどうしても愛称で呼び合うようになっていった。

開設当初は、やることを決めて来るという子も、そこにある物で見繕って遊びだす子も少なかった。子どもとスタッフそれぞれが何をしたらいいのか、どのように働きかければいいのか、探り合いの時期だったといえる。「夢工房」に来ると「何すればいいの?」「何を教えてくれるの?」ときいてくる子が多かった。逆にスタッフに、「折り紙しよう!」「トランプは?」「お手玉は?」と言われると「それはいや。」「つまんない。」と返ってくる。入ってくるなりスタッフに「何する?何したい?」と声をかけられ、出て行ってしまう子もいた。ふらっと入って来て、遊んでいる子を眺めてそのまま帰って行く、校庭から窓越しに「夢工房」で遊んでいる友だちに声をかけていく、そんなことを繰り返しながら、気が付くとその子が中で遊んでいたというように、「夢工房」で遊ぶ子どもはしだいに増えていった。

(2) 狭間の子どもたちの発見

連休明けの本格実施と同時に不審者情報があり、2日間にわたって学年ごとの集団下校となった。連休明けの1ヶ月間に5回の集団下校があった。一斉下校集団下校の日は、年長の兄弟と帰る子や、親の迎えを待つ子だけが「夢工房」で過ごし、それ以外の子どもは

集団で帰るということが、急遽学校との調整で決まった。最初の集団下校となった日、低学年の子どもたちが各地区の担当の教職員と校庭を出た後、校門の外に数名の子が立っているのに気付いた。不審者対策で集団下校しているのに、子どもたちだけで路上にいるというありえない状況に声をかけると、民間学童保育の送迎車を待っている子たちだった。すぐ「夢工房」に連れて行き、迎えが来るまで過ごさせることにした。

通常は昇降口付近で待つのだが、地区ごとに並ばせられたのでとりあえずは自分の地区の列に並び、校門を出た場所で別れたらいい。委員たちはこの民間学童保育の施設を良く知っており、迎えに来た指導員も顔見知りであったため、今後も同じように緊急の引渡しや集団下校があった場合は、「夢工房」で学童保育からの迎えを待つことにしてはどうか、とその場で話し合った。保護者には学童保育施設と「夢工房」スタッフの双方からその日のうちに連絡する、学校にはまず「夢工房」が連絡するが学童保育施設からあらためて正式に学校にお願いする、という方針を決めた。その日のうちに、学童保育施設から学校に電話連絡があり、学校としても賛成である旨伝えたと、教頭が知らせに来た。「夢工房」から保護者への連絡は、それぞれの家庭と顔見知りの委員が連絡した。その晩、筆者が1年生の母親に電話をすると、「今日迎えに行った時、指導員さんから話は聞きました。学校まで迎えがあるということで、すっかり安心しきっていましたが、考えてみれば、いつでも授業が終わると同時に迎えが来ているという事はありえないですよね。子どもがどのように放課後を過ごしているか想像することもなかった。親が考えてもみななかった時間が存在したことに、今回すごくはっとさせられました。」と話した。この日以降は集団下校に関係なく、学童保育施設の迎えを待つ子どもたちが「夢工房」で過ごすようになった。地域での顔のつながりが活動をスムーズに進める上で役立つ事例でもある。

この民間学童保育に通っていたのは1年生が2名、2年生が1名、2年生の兄にあたる6年生1名。これまでは昇降口や校門付近で待っていたが、迎えは必ずしも時間どおりではなく、同じ場所で待ち続けることは大変なことだった。校庭で遊びの仲間に入ってしまうえば、迎えに来た時に見つけられないし、子どもの側からすると遊びを中断して抜けることには苦痛があ

る。学校側もこの学童保育に通っている子どものことは把握していたが、対応は各担任に任せられていたようだ。

2年生のMは放課後に地域の子と遊ぶ経験が少なかったせいかなかなか打ち解けず、スタッフともほとんど口を利かずに一人で遊ぶことが多かった。ある日、Mが折り紙で跳ぶ蛙を折っていたのを見かけ声をかけると、跳ばせてみせてくれた。傍らでは2年生のDが、細長い紙切れを線路のように繋いで1人遊びをしていた。この紙に沿って跳ばしてみると、Dが面白がってまたその先に紙をつなげてくれる。意図する方向に跳ばせない筆者に代わってMが蛙を操るうちに、Dの「今度はこっち？」と言う問いかけにMも自然と応えるようになっていた。これが筆者が初めて「夢工房」で見たMが他の子と関わる姿だった。6月になると気の合う学生スタッフとおしゃべりしたり、友だちと一緒に遊んだりする姿が見られるようになっていった。担任のK先生もこの変化にいち早く気づき、Mのことで「夢工房」のスタッフに声をかけるようになった。6月末の日誌には、「K先生から『Mちゃんがとても変わってきました。夢工房で居場所ができて、落ち着いてきたようです。』と言われました。とても嬉しいですね。」と記されている。Mの変化は担任にとって喜びであり、それがまたスタッフの喜びにもなっていた。

しかし、6年生であるMの兄は、一斉下校の日以外は「夢工房」に来ることはなかった。今までと同じように友達と離れて校門脇の給食搬入口に一人座り、迎えの車を待つ姿をよく見かけた。

(3) 子どもたちの企画の援助～食育の活動支援

6年生の子どもたちは1人で遊びに来るというより、自分たちの活動場所として利用することが多い。その1つが「THE☆弁当酢」の食育の活動である。数年前に東六地区の子たちとバランスの良い食事法「お弁当箱ダイエット法」を学んだ一人が、自分の友だちの弁当を何とかバランスの良い物にしたいと考え出したのが、フェルトのおかずを使った「遊んで覚えるお弁当箱ダイエット」である。5年生の時に夏休みの宿題として提出したが、その後はこれを活用して友だちに教える場がなかった。本人がセミナーの主催者の一人である宮城学院女子大学の平本福子教授に話すと、「それなら『夢工房』でやってみたら、手伝うから」

と支援を請け負ってくれた。

「夢工房」が会場を提供して、6月からは日常的な食育のプログラムが始まった。日常的にはフェルトで作ったおかずをお弁当箱にバランスよく詰めて遊ぶのだが、このフェルトのおかずが1組ではみんなで遊べない。平本ゼミの学生Oが同じ物をたくさん作ってきた。グループ名の「THE☆弁当酢」はネーミングも表記も子どもたちが決めたものだが、それを平本教授が面白がってくれたと、子どもたちは大いに盛り上がっていた。子どもたちはメールで教授や学生と連絡を取り合った。最初は親のアドレスを使って親に手伝ってもらいながらメールをしていたが、そのうち1人でメールをやりとりするようになった。メールであれば、小学生が大学といつでも直接つながることができる。しかし、活動の計画も内容も、子どもたちはなかなか決めることができない。その上全員が課外活動の吹奏楽の仲間、練習に忙しかった。そこで学生Oは、吹奏楽の練習が終わる時刻に合わせて練習会場にやってくる、相談に乗っていた。養護教諭の計らいで校内の教職員や校医などの学校保健委員会で活動報告をすることになり、初めて自分たちの力でプレゼンテーションの資料を作成した。

夏休みには、「ツクツクツクつくろうyo」という行事を彼らが企画した。2日間にわたる行事で、1日目は理論を、2日目には参加者に実際にお弁当を詰めてもらい外で食べるという企画である。この説明のためのプレゼンテーションの準備も、おかずの献立作りや買い物・調理も全部「弁当酢」が行った。もちろんレシピ作りや計画で抜けている所など、子どもではうまくできない部分は平本ゼミの学生や「夢工房」のスタッフが補ったが、それでも子どもたちには大変な作業量であった。全うしなければの責任で最後までやり通した。10月には、来日した国連子どもの権利委員夫妻の前でこの活動を報告したが、この一連の活動については、DCI日本支部発行の『子どもの権利モニター No.75=76』が詳しい。「弁当酢」の子どもたちの達成感は並々ならぬものであったが、それを見ている他の子どもたちにも、自分たちも何かやってみたいという気持ちを起こさせていった。

(4) 遊びの発展～裁縫や工作を通して

「夢工房」の遊びはその時々で変わっていくが、そ

の中で定番になっている活動のひとつに裁縫がある。開設以来毎日誰かが針箱を出している。子どもたちは「お針」とか「縫い物」という言い方をして、「夢工房」の裁縫セットを出してもらう。時間内に終わらなかった作品は「続きのお仕事」と言う箱に入れて帰り、次に気が向いた時に続きをすることができるため、継続しやすいと考えられる。学年・性別を問わず人気がある理由は、何より子どもたちが家庭で針に触れる機会がないためだと思われるが、各自が作りたい物を自由に作っていること、安全のためスタッフが一人付かず離れず見守っていることも大きいと思う。長い人気の影には、管理面で必ずしも順調ではない時期もあった。それでも続いているのは、子どもたちひとりひとりにあった対応ができたからだと考える。

そもそも最初は、お手玉作りに始まる。お手玉を「夢工房」に置いたのだが、お手玉遊びよりボール代わりに投げて遊ぶ方が多かった。かつてのお手玉作りの行事の経験から、自分のお手玉を作ると大事に持ち歩き家でも遊ぶことをスタッフは知っていた。そこで、残っていた材料で作らせてみたら、その後子どもたちの作品は巾着袋や手提げ袋に発展していった。綿を詰めた「小さな布団」に発展させたグループもあった。ふわふわした感触が心地よいようで、多くの子が大小さまざまな「布団」を作っていた。7月の日誌に「今日は、裁縫教室をしました。」と学生スタッフが書いているように、この頃は糸通しから玉留めまですべてスタッフがつききりで教えなくてはならなかった。1年生のC子はなかなか同学年の子と遊ぶことができなかったが、裁縫や工作が好きで呑み込みも早く丁寧に作業するので、スタッフに良くほめられていた。ほめられると嬉しくてまた夢中になり、スタッフを独占するようになれこれ話しかけるようになった。手を動かしながら学級のできごとや家族のことなどについておしゃべりすることも、子どもにとって楽しみであったようだ。C子と他の子との接点を作りたいと、「教えてあげて」とC子に頼むと、C子の他にも子どもどうして教え合う姿が増えていった。

裁縫に人気が出るにつれて、スタッフは次第に道具の扱いに神経を失らすようになっていった。7月の日誌には、「気になったことは、針の取り扱いです。縫い終わるとポイツとそこらへんに置くので、いつも針山に刺すようにうるさく言っていました。」とある。

針は必ず針山に刺すように言っても、すぐテーブルに直に置いてしまう。道具の後始末の悪さは裁縫道具に限らない。やりっ放しで次の遊びに移り、片付けの段になると自分ではないと帰ってしまう子どもが多かったが、針は一步間違えば危険であるだけにしっかり管理をしたい。子どもたちにどう働きかけるかがスタッフの悩みでもあった。そこで、ひとりひとりが責任を持って道具を扱えるよう、針を1本だけ刺した針山とはさみを1セットとし、食品トレーに入れて貸し出すようにした。これで針山に針を刺すことはだいぶ定着したが、集中力のない低学年の子は縫いながら席を立つので、次第に縫い物を教えるより、管理の方に目が向きがちになっていった。

特に体も小さく学習面で遅れが見受けられる2年生のDに、スタッフは振り回された。造形が好きで裁縫もしたくて仕方がないのだが、目に入る物に次々興味を持ち動いて行くので、針の行方などすぐわからなくなってしまった。9月にはついに「Dちゃんに針を渡すときは目を離さないように!!」と、スタッフ間で申し送りがされるようになった。Dと仲よしの3年生のRもじっとしているのが苦手で、友達との遊びは新聞紙を丸めたちゃんばらが多かった。DやRの問題は、針山を置き去りにしているうちにどこに置いたか忘れることだった。そこで、腕にゴムではめる針山を購入した。Rが来た時に「これはR君用の針山。すぐ動かなくなっちゃうから針山がR君について行くようにこれ買って来た。これ、はめてみて。」と話しかけるとすぐに腕に付けた。その日もやはり落ち着きなく裁縫の途中でも動き回っていたが、「僕の針山!」と声を出して腕の針山に針を刺しては、移動先のテーブルでまた縫い始めていた。それを見ていたDも、「僕もこれ。」と同じタイプの針山を使うようになった。この針山によって針の管理は楽になったものの、入れ替わり立ち替わり新しい子がやって来る。針やカッターの使い方や遊び道具の片付けについては繰り返し声をかけ、その子その子にあったやり方の模索が続いていた。

10月になると子どもたちがかなり落ち着き、自分たちで遊びを見つけたり、目的を持って「夢工房」で活動をしたりするようになった。自分たちで考え出した工作など遊びの工夫もみられるようになった。学童保育の迎えを待つMは、だいぶ話をするようになっていたが、まだまだ他の子と同じようにスタッフに甘える

ことができず、少し遠くから眺めている感じだった。それでも、スタッフとの関係は少しずつ作られていた。「だいぶ前にMちゃんにミサンガを結んでもらったのですが、今日はそれをつけて来なかったの、Mちゃんに問い詰められて……。ずっとつけてないといけないものだとは知らなかったの……。」(10月の日誌)ある日彼女がお花紙を濡らして和菓子のようなお花を作り始めた。Mは絶対作品を持ち帰らないので、廊下にある作品展示用の机に飾ってみた。すると、それをまねして作る子たちによって徐々に遊びとして広がり、子どもたちの間でMの存在感も大きくなっていった。この頃3年生のグループは、楊枝を板状に並べて貼りつけた物で家や舟を作り始めた。次々と作品が増えていくのが楽しみようで、半年近くも工作に取り組むなど、自分たちならではの遊びも展開していた。「子どもたちってこちらがアプローチをかけなくても、自分で楽しそうにいろいろなものをつかって遊びますね。これってこういう風にも使えたりするのか、とか、ダンボール箱に穴があいているだけでくじ引きを作ってみたりと、子どもならではの発見が見受けられました。」(11月の日誌)

学生スタッフの子どもたちとの関わり方もだいぶ変化していた。「Aちゃん、Sちゃんを中心に、片付けがみんなでできました。いっしょに片付ける姿勢で根気よくほめつつするのがいいみたいです。」「まだまだ騒がしい所はありますが(自分の責任もあり……)半年前に比べて、子供たちも落ち着いてきたようにみられる今日この頃です。この頃はおんぶ、抱っこだのを言わなくなったし、言われたとしても落ち着いて対応すれば子どもたちも分かってくれるようにはなりました。子ども達の興味はけっこう一時的な所もあり、一緒になって騒いだりして、読書をしている子ども達の迷惑をかけてしまっていたことが今までありました。子どもと同じような目線ではしゃいだりすることも悪いことではないのですが、もうちょっと冷静に考えることも必要だなと思います。」日誌のコメントも、事実のみの記述から、スタッフとして子どもの行動をどのように見たのか、それに対してどのように関わるかという点についての記述が増えている。

11月半ば、3年生のH君がやってきて、家では一度やっただけという裁縫を器用にやって行った。「夢工房」が気に入ったらしく、頻繁に訪れてくるようになっ

た。彼がお手玉を縫い上げそれを使って遊び始めると、他の3年生がお手玉作りに取り組み始めた。今まで「夢工房」に来たことのない3年生の男の子が次々やってくるようになり、「夢工房」は男の子の裁縫ブームとなった。お手玉だけでなく袋作りなど、それぞれ自分の作りたい物を作るようになって行った。糸の玉留めや玉結びも、一人に教えると教え合いながらどんどん覚えて行く。これを見て1年生の男の子たちも「僕たちもやる。」と裁縫に加わった。黙って見ていると、好きな形に切った布を重ね、その上を縫って行くだけである。「何を作るの?」と聞くと「ほく、縫ってるの。」という返事。1年生は作品を作るのではなく、ただ縫うことそれ自体を楽しんでいたのだ。H君は家からフリースの古着をもらってきて、布として使いだした。ふわふわした感触から手袋を作ろうと思いつき、まず筒状に縫った。それを手首にはめて親指の辺りに穴を開け始めた。親指が出ることを確認すると、今度は親指を囲むように筒を縫いそれを今の穴に縫い付け手袋が完成した。家庭科の教員の経験が長いスタッフは、「家庭科の授業では絶対作らない作品よ。まず作らせようとは思わない。型紙を使って作るという前提があって、みんな同じ工程で作ることしかない頭では、絶対作れない。」と言って感心しきっていた。

裁縫ブームが1年生男子にまで広がり始めると、また針の始末の問題が出てきた。学生スタッフも管理の関係でかなり考え込んでいたようだ。この頃ボランティアに加わったある学生は、「初めて夢工房に参加し、小学生のパワーに圧倒された。……子供ができること、やらせられること、おとながやってあげなければならないことの見極めが難しかった。例えば、針作業では『針・はさみ』=『危ない』と言う考えが定まってしまう、どこまで手助けしてあげられるのか、多少過保護になってしまったようにも思う。子供の安全が第一ではあるが、子供がやりたいと望むことはできる限り挑戦させてあげられるように努力したい。」とコメントしている。ある学生スタッフは、家庭科教育の講義が終わった所だと言って大学からメールを入れてきた。「やはり針の管理は充分しなくてはならないと授業を聞いて思いました。いろいろな遊びをしている中では、低学年の子にさせるのは無理なのではないでしょうか。」というような趣旨のメールだった。活動を離れても「夢工房」のことを考えてくれているとい

う点に感謝しつつ、うまく行かないからやめさせるといふ判断で良いのだろうかという疑問も生じた。実行委員の1人が考え出したのは小引き出しでの管理だった。引き出しに1人分ずつの裁縫道具をセットに入れて、貸し出しは引き出しごととし、必ず借りたスタッフに返却するというようにした。この方法によって、何人に貸し出しているかが一目で分かるようになった。発泡トレーに入れるよりも1人分という意識付けがしやすく、使うと同時に効果が現れた。「前よりも針の使い方も良くなった。こちら側から呼びかけなくても元に戻したり、片付けたりできるようになってきたので、ひやひやすることなく見ていることができた。」とスタッフにも好評だった。「裁縫は面倒」の意識がスタッフからなくなったことは、その後も裁縫ブームが継続していく力になっていると思われる。「1年生が、『ママにあげる』と言って一生懸命クッションを作っていたのが印象的でした」など、その後のスタッフのコメントに管理面での記述はなくなった。

12月初旬、Hの母親がたくさんの布と編み棒のセットを持ってやって来た。「Hは裁縫が面白くて仕方ないようです。家で私と一緒にやろうと言っても、家ではまったくしないんですよ。夢工房でするのが楽しいみたいです。夢工房でこういうことができてとてもありがたい。」と言って行かれた。同学年や下級生の男の子たちにブームを広げたのは、H君のおかげだと伝えた。このときの編み棒のおかげで、この後編み物ブームがやってくるようになった。棒針編みができるスタッフは限られていたが、Hがスタッフや子どもたちに教えてくれた。Hから教えてもらった1年生のC子が家に帰って母親からも習い、教え手に廻った。「今日はC子ちゃんに編み物を教えてもらいました。先週はうまく話せなかったのですが、今日は名前を覚えてくれて、たくさん話してくれたので嬉しかったです。」「編み物に初挑戦しました。むずかしい……。子どもたちはできているのかいないのか分からない感じがですが、満足気でした。」こういう学生には、自然と子どもの輪ができてくる。その一方で、「編み物、棒編みができなくて反省です。棒編みが夢工房に現れたときから覚えてこようと思っていたのですが、行動していない自分に自己嫌悪です。これからは様々な技を習得していきたいです。」と言う学生スタッフもいる。これに対しては、後日、実行委員から「これはムリして

覚えなくていいんだよ。子どもに教わってみて。」とコメントが付いた。子どもから子どもに、子どもからおとなに教えられて多くの子どもが編み物の技術を身につけ、これもまた定番の遊びとなっていった。

裁縫や編み物では、スタッフ自身が多くのことを学んだ。安全面での問題も、ひとりひとりの子どもにあった工夫をすることで解決できること。発達の段階によっては行為そのものを楽しんでいる子どもがいるため、必ずしも作品にする必要はないこと。おとなが子どもたちに教えることだけがすべてではないこと。そして何より、困った出来事の解決策を考え続けることで子どもとの関係が自然とできてくるということに気づかされた貴重な経験であった。

(5) 困難を抱える子たちとの関係

秋頃からは編み物や工作などの静的な遊びをじっくりする子が増え、「夢工房」の雰囲気がとても穏やかになっていた。この頃から、情緒障害児学級の子たちがふらっと「夢工房」に入ってくるようになった。何かをするというより、遊んでいる子たちのまわりをぐるりと廻って、その子たちの楽しそうな雰囲気を楽しんでいるように見えた。

4年生の自閉症のA美が初めて「夢工房」に来たのは9月だった。A美たちは保護者の迎えで下校しているため、迎えまでの間や迎えの後、絵を描いたり本を眺めたりしていた。A美は思い立ったように道具入れの所に行き、他の子と同じように紙やクレパスを出して絵を描き始める。横1列に丸を並べて描き、さらに色を変えて何段も描いた上で、最後に自分の名前を書く。グラデーションに塗り分けられた絵はいつも同じだが、何枚も描く時もあれば、1枚だけの時もあった。子どもたちの遊ぶ時間が長くなるにつれ、この学級の母親たちとスタッフが話すことも多くなった。A美の母親はいつもA美を見守っていたが、そのうち自分も開放用図書を読むようになり、「本当に久しぶりに本を読んだ。」とスタッフに声をかけてくれた。ある日、A美の担任と母親が「夢工房」で絵を描いているA美の様子を見ながら話しこんでいた。「A美にはいろいろな趣味というか楽しみを増やしてやろうと、造形のアトリエとかいろいろな所に連れて行っていたけれど、こうやって遊んでいる様子を見ると、今までやっていたことはA美にとっては遊びではなくて義務

的なスキルになっていたんじゃないかと思うようになりました。」という母親の話を、担任はほほ笑みながら聴いていた。

同じ学級の2年生Y太は、「夢工房」以前から家族で土曜の図書室開放に来ていたが、未就学の弟のお付き合いという感じだった。しかし放課後迎えに来た母親と一緒にY太も本を借りるようになった。貸出の際に発行される貸出票には、読後の感想文や絵を書く欄があり、寄せられた感想や絵は月1回発行の広報紙に載せている。Y太が書いたたどたどしいひらがなの感想がこれに載ると、「これは書かなくちゃいけないと思っただらしくて、眠いと言いながら頑張っただけなんです。担任の先生にも見せました。」と母親が感慨深げに話しに来た。その後も継続的に本を借り、感想も毎回寄せてくれた。母親の添え書きを頼りにやっと判読したり、感想だけでは意味が不明でスタッフがその本を読んで補足したりしながら、Y太の感想は広報紙に載り続けた。購入図書のリクエスト用紙を常備すると、Y太もお気に入りのシリーズの本をリクエストしてくれた。

満足できる日が続いていたのであろう、Y太は「夢工房」にいるおとなや子どもたちとたくさん話しかけるようになり、年が明ける頃には鬼ごっこやお店屋さんごっこに混ざるようになった。年度末が近づいた頃、帰りにどうしても遊んでいきたいとY太が母親に訴えたため、母親は一度家に帰り、改めて約束した時刻に迎えに来た。翌日も帰る時刻を決めて母親は帰っていった。「今度は時間になったら自分1人で帰らせてみてください」という母親の言葉に従い、1人で帰すことにした。毎日授業が終わる時刻に一度母親が来校して学校から引き取り、その後1人で「夢工房」で遊び、決まった時刻になると1人で帰っていくということを数日続けた。修了式の日には、家に帰って昼食をとってから1人で「夢工房」に遊びに来ることまでできるようになっていた。わずか半年の間のY太の劇的な変化であった。

同じ頃、通常学級に在籍している高学年のTもよく宿題をしに来ていた。Tは他の子が帰った後も1人で静かに勉強をしていることが多かった。11月のある日、活動直後の「夢工房」を覗いた筆者に、「T君が宿題終わらないまま4時になってしまったと泣いてしまいました。泣いたまま帰ってしまったけど、心配です。

大丈夫でしょうか。」と言うスタッフの様子が並々ならぬ雰囲気だった。Tは「ここまでやる」と印をつけた所まで終わらなかったのを苦にしていたらしい。「どうしてもここでやらなくちゃいけない。家でゆっくりしたい。」としきりに言っていたそうだ。問題数も多く、普通ではない様子だったという。低学年の頃、よく授業時間にも職員室で過ごしているのを見かけていた筆者は、軽度発達障害の可能性もあるので、担任に状況を話して対応方法を相談した方が良いと判断し、当日のスタッフが直接担任に伝えた。この日のスタッフは軽度発達障害への関心が高く、良く勉強をしていたので「もしかしたら」の思いは持っていたそうだ。

Tは今まで、学校が終わったらまっすぐ家に帰るといふ、母親と決めた生活パターンを変えることはなかった。「夢工房」に寄って宿題を終わらせて帰るといふのは、Tが初めて自分からパターンを破った行動だった。「夢工房」で決めた所までやってから帰るといふTの思いを大切にしたい。勉強に関しては、ここまでやろうという目安をつけてあげてほしい。割り算は授業でもてこずっているのだから、問題数は少なく設定した方がいいという方針を担任と相談して決め、日誌でスタッフに伝達した。思い返してみると、夏休み前から時々「夢工房」に来て宿題をしていたが、当時はスタッフに余裕がなく、静かに勉強をしているT男を気に留めることがなかったのがかえって良かったのかもしれない。5月の記録に、「T君は1人で黙々と宿題をしていました。近づく『見ないで。』わかんないところがあったら、きいてねと言ったら、私にではなくあっちゃん（学生ボランティアの1人。筆者注）にきいていました。私にきいても無駄だと思ったのでしょうか。」とある。「あっちゃん」にきいたのは、彼女が学校支援ボランティアでTの学級に入っていたからだ、このとき初めて気が付いた。

この件を境に、発達障害に関する情報をスタッフどうしで紹介し合うことが多くなった。時には同じ大学から来ている学生スタッフどうしで、「特別支援教育が始まるのだから、必修ではなくてもこの授業をとった方が良い」などの情報交換をする姿もみられた。保護者から障がいに関する図書の寄贈があったが、スタッフがもっとも熱心にこの本を借りていった。

子どもたちが抱える困難はこれだけではない。6年生のA子は家庭事情が複雑で、母親が夜間に仕事をし

ていることなどから、子ども会の中でも特別な存在になりがちであった。同じ地区に住む実行委員はA子の家庭を何かと支援していた。A子はいつも黒のジャージ姿。造形のセンスがよくいろいろな工作を作るのだが、戦闘的なものが多く、虐待防止電話相談員をしているスタッフBはいつも彼女の様子を気にかけていた。2年生のDとはきょうだいになるが、ある日を境にぱったり二人とも「夢工房」に来なくなってしまった。

そのような時、学生スタッフから深夜11時過ぎにメールが来た。その場に居合わせた学生スタッフどうしで相談してよこしたらしい。「こんばんは。かおりん(学生スタッフの愛称。筆者注)です。……A子ちゃんが16時すぎに本を借りに来ました。……A子ちゃんは金曜にも本を借りていたのを私も知ってました。聞くともまだ返してないと言うので1人1冊だから、前の本を返さないと借りられないよと言いました。何度も『マズイよ』と繰り返していたので、話を聞くとお父さんや家族も読んでるからすぐ返せないとのことでした。A子ちゃんは、友達が待っているのに図書室内をうろろうしてから帰ったこともあって、何だか心配になってメールしました。夜中に長々とすみません。日誌にも今日のことは書いたのですが、今日のうちに伝えておきたくて連絡しました。A子ちゃんがおびえていたようにも見えたので心配です。」「かおりん、ありがとう。何かを求めて夢工房に来ているように思えます。Iさん(スタッフで主任児童委員。筆者注)はその時いましたか?彼女は民生委員としてA子ちゃんの家に関わっているんだけど…ずっと夢工房に来てないし、A子ちゃんからも夢工房には行けないと言われたことがあるんで、気になることはいろいろなんです。あした様子をみに行ってみます。本は何を持って行きましたか?返事がこんな時間になってしまっただごめんなさい。メールただけで本当に良かったです。学校でA子ちゃんを見かけたら、声をかけてあげてください。わざわざ夢工房に来るのは関わりたいからに間違いのないと思うので…」「A子ちゃんが来たときはIさんと、ちゃぼ(学生スタッフ。筆者注)もいましたが、自然と私が話掛けました。その後、IさんはSちゃんと帰る約束をしていたので詳しくは話せませんでした。金曜に借りた本は『八犬伝・一』で、今日借りたかったのは続きの二と三です。もう読んだの?と聞い

たら、すぐに読んだよと返事が返ってきたので本が好きなのかなと思いました。私も戸惑いが多くてそれがA子ちゃんに伝わってしまっているのではとか、次に会ったらどうすればいいのかと不安に思っていたので、返事をもらえてよかったです。忙しい中、ありがとうございました。明日、よろしくお願ひします。では、おやすみなさい。」「新しい本ですね。蔵書印が押しあてられているはずなので、売りには出せないと思うんだけど、心配。返さないと借りられないこと、一人一冊一週間という約束は崩せないことは伝えておかないといけないですね。Bさん(スタッフ。筆者注)にも相談してみます。虐待に関して彼女は専門的知識があるので。A子ちゃんの事情については、会ったときにします。あしたは時間的に厳しいですが、なんとか動いてみます。夜遅くごめんなさい。」「メールのやりとりは午前0時を廻るまで続いた。

翌日、A子が「夢工房」の終了時刻近くにやって来た。昨日のことには触れずにさりげなく接したところ、翌日は弟に続いてA子も同じクラスの仲よしOと一緒に「夢工房」に姿を現した。弟の名前で借りていた本も含めて全部返却して、仲よく3人で帰って行った。その日もスタッフのメールが行き来した。「お疲れさまm()m。A子さん本の返却が滞っていましたが今日4、5冊全部返却完了しました。そしてまた今日八犬伝、兄弟で1冊ずつ借りていきました。次に借りたいといってきたら返してからとさり気なく声がけするのがいいと思います。休み時間にだまって持って行って読んだりしているようです。自分で言いました。おもしろくてすぐにでも続きが読みたいということでしょうか。うまく声がけすればなんとかなるでしょう。宜しくおねがいます。」と、地域スタッフのSさん。学生スタッフのたまちゃんからも「A子ちゃんが本を返してくれました☆金曜日の行動についてはよくわからないけど、とりあえず一安心。Dちゃんもはじめは表情が無く虚ろな目で返事もはっきりしなかったのだけど、後半は前のDちゃんに戻った感じでした。まだ少し違和感があるのだけど、変わりやすい年頃なのでなんとも…んーでもよかった♪」学校支援ボランティアの間も、学生スタッフたちは気をつけて見守っていた。「A子ちゃん、休み時間に見たときは一人でフラフラしていたのだけど、放課後は同じクラスのOと仲よさそうにしていました。OちゃんはDちゃんのこと

よく見てくれて、帰りは3人で帰っていきました。来週はテストで行けないので、金曜日にちょっとよってみます。「さっき、Sさんから今日の詳しい様子をメールでもらいました。たまちゃん、かおりんのおかげで、サインを見のがさないで済みました。ありがとう。本当にタイミングよくキャッチできて良かった～☆まだまだ見守らなくてはならないけど、まずは来てくれないうね。本当にありがとう☆」「はい！私でも力になったなら嬉しいです。まだまだ勉強不足ですが、良い経験になります。お疲れさまでした。こちらこそ、これからもよろしくをお願いします。」もし最初に見かけたとき、終了の時間だからと知らぬ振りをしたり、追い返していたりしたら、もう2度と「夢工房」には来ていなかったら。また、学生スタッフがメールを入れてくれなかったら、翌日のスタッフにつなげることができず、たとえ来てくれても通り一遍に「本持って来た？」と問いかけてしまい二度と来なくなってしまったかもしれない。この日からまた、A子とDのきょうだいは以前のように「夢工房」にしばしば来るようになった。

(6) 2年目を迎えて

春休みは次年度の準備期間として「夢工房」を閉鎖し、その間に前年度の反省をもとにいくつかの点について学校と調整を行った。

「夢工房」の活動場所として校庭は使用しないことになっていた。しかし、鬼ごっこなど身体を使う遊びを求める子が多く、そこでのふれあいの重要性も感じたので、やむを得ず時には中庭を使用していた。これに対し、あくまでも活動場所は図書室だけと難色を示す教員もいたが、新年度からは全学年の授業終了後にスタッフ付き添いという条件で、中庭の使用を正式に認めてもらった。

開設時間については、低学年図書室の使用割り当てがないことを確認したうえで、1年生の下校時刻に合わせて開始時刻を決めていた。しかし、金曜日の日程は1年生4時限、2年生5時限と違っており、前年度数回、金曜日5時間目の「夢工房」開設時間中に2年生が自習で図書室を使用することがあった。そこで、図書室を2年生が使用する可能性があるとの理由で、金曜日は5校時終了後に開始ということになった。1年生にとっては、下校後に遊べない空白の1時間が金

曜日だけできることになる。そこで、学童保育の迎えまで利用している子どもがいること、ある曜日だけ違うのは1年生には理解しがたく混乱する可能性があることを学校に伝えた。前年度は、下校時刻が変わる場合は開始時刻をそれに合わせていたが、下校時刻が早まったことを知らないスタッフが通常通りに学校に行ったため、子どもたちがスタッフ不在のまま遊んでいたことがあったという経験も伝えた。しかし、おとな（教員や「夢工房」スタッフ）がいないときには図書室を使用しないよう指導するという方針が学校側によって決まり、金曜日の開始時刻が変更されて活動時間が短縮されることになった。

その他には、緊急時の集団下校の際に「夢工房」に残るかどうかは学校の責任で判断を行うので、「夢工房」は判断を学校に委ねること、また、PTAから緊急用に借用していた携帯電話が解約されるため、緊急連絡のみ職員室の電話で取次ぐということなどを確認した。

新年度になるとそれぞれ学年が上がり、3月までとは違う顔ぶれの子どもが来るようになった。前年度の1年生の利用は夏休みの頃からだったが、新年度は入学早々やって来る子がいた。入学以前からきょうだいが「夢工房」や図書室開放を利用していた子どもたちだった。新年度になり、子どももスタッフも少しずつ入れ替わっている。そのため、遊びのルールの決め方や片付けの方法については前年度初期に戻った感があるが、何をするのかをあらかじめ決めてくる子が多く、学年に関係なく遊びの輪に入れる子が増えてきているのは間違いない。落ち着いて遊んでいる子が多く、初めて来た子もその遊びを真似たりして、遊びを見つけやすくなっているようだ。学校に来たついでと、本を借りて行く保護者も増えている。布や遊び道具も時々家庭から寄贈される。今年度はパソコンの子ども用ソフトを用いた名刺や賞状作りが、新たにブームになっている。図書室のパソコンにインストールされていたもので、学校の授業でよく使用するらしい。高学年の子どもたちは使いこなすが、スタッフはこのソフトを使ったことがない。パソコン使用時にはスタッフが必ず付くことになっているが、教えるのは子どもたちのほうである。スタッフも子どもたちと一緒に、「へー、すごい。」と感心しながら操作方法を覚えている。

「弁当酢」の食育の活動も継続されている。前年

のメンバーのほとんどが卒業したため、残ったメンバーの6年男子2人が継続し、新たに6年生女子2人が加わった。4人は同じ子ども会の幼なじみである。新メンバーのH子は昨年の夏休みの行事にも参加しており、責任を持って活動をリードしているのだが、話し合いでは他のメンバーの発言に追従してしまう一面を見せていた。H子は片手片足に麻痺があり、足に装具を付けているが、麻痺した手は普段はさりげなく隠している。障がいには気付いていない子も多い。仲よしのI子でさえ、怪我の一種と誤解しているようだった。前年度の夏休みの行事参加の際には、母親から「手に不自由があるので調理はできないが、お弁当を詰めるだけなら大丈夫だと思うので参加させたい。作ったお弁当を持って出かけることになっているがそれには行かないで、プール開放の方に参加させてほしい。」という連絡があった。当日は受付1時間前に来たため、茄子とピーマンの味噌炒めを手伝って、炒めたり味付けたりの手伝いをしたりと積極的に参加したが、お弁当を持って出かけることはやはりしなかった。プールは毎日あるので、皆と出かけるのが嫌なのだろうと受け止めていた。

2年目の「弁当酢」は、宮城学院女子大学の学生Mがお姉さん役となり、H子が率先して下級生にお弁当詰を教えたりチラシを作ったりしていた。夏休みの「夢工房」での行事を前に、埼玉県で開催される食育セミナーに参加しないかと宮城学院の平本教授から提案があったのは、7月初旬のことだった。参加するかどうかを子どもたちに尋ねると、「私は行かない。」とH子だけが即座にきっぱりと断ってしまった。小さい時からH子を良く知るIの母親によると、子ども会の行事でもなんでも、どこかに出かける行事にはいつも参加したがらなかったそうだ。前年度の様子と考え合わせると、新幹線に乗っての遠出は難しいかと思われた。しかし、数日後にはH子から「私も食育セミナーに参加します」と、末尾に絵文字が入った明るい調子のメールが入った。急転を不思議に思っていると、学生のMから以下のような話をされた。「H子ちゃんと残っていたら、H子ちゃんが私のバックをいじっていて、私の障害者手帳を見つけたんです。最初は『定期入れだよ』と隠してしまいました。そうしたらH子ちゃんから『私は手帳を持っていて、バスが無料になるんだあ』という話をしてくれました。そこで私はH子ちゃん

んが手帳を持っていることに気付きました。それで手帳を見せ、『色は違うけど同じだね』と2人で話しました。」学生Mが障害者手帳を持っていることは、私達もまったく知らなかった。セミナーへの参加をきっぱり断った直後のことらしい。これをきっかけに、H子にとって学生Mの存在は特別なものになっていったようだ。「H子ちゃんとは、チラシを作っている頃一緒に帰ることもあって、H子ちゃん自身から病院の話や中学校に行ったらみんなとは違う学級に入る話を聞きました。」(学生Mからのメール)

埼玉でのセミナーでは「弁当酢」の活動報告もすることになり、夏休みに入ると連日その準備となった。セミナーについて行くのは学生Mだけということで、子どもたちはすっかり張り切っていた。その日Mが障害者手帳を利用して購入するHをつれて切符を買いに行くことになっていた。「弁当酢」の活動を終え帰り支度の最中だった。H子が「ねえ、みいちゃん(学生Mの愛称。筆者注)切符買いに行こう」と促すのを「弁当酢」のN男が聞きつけた。「え?今買いに行くの?おまえら一緒行くの?」「行くよ。だって…だってみんなと違うもん。」筆者が「H子ちゃんは安くなる券があるので……」と言いかけると、「なんで?」というN男にH子が「身体障害者手帳を持っているから」ときっぱりと言った。「うわあ、いいなあ。……でも、身体障害者か。」「見る?」「見せて。」「いいよ。みいちゃんも持ってるよ。」と手帳を即座に出してN男に渡しながら再び「みいちゃんも持っているよ。」「え?みいちゃんて?」一瞬の沈黙の後、学生Mが「持ってるよ。」と答えた。「これ?」「ううん、これじゃないの。色が違うの。身体障害者手帳は同じだけど」「なんで?なんで?なんで、身体障害者なの?」「ちょっと心臓が……」「心臓の病気なの?心臓病なの?走り回れないの?」「走り回れない。走っちゃだめ。」ここで筆者が新幹線内のことに話題を変えたが、その後もまだ質問を続けるN男にH子は「これがあると新幹線にも使えるんだよ。バスもただになるの。」と自信たっぷりに説明を続けていた。そして、H子は「行こう、行こう。」と嬉しそうにMと出て行った。筆者には学生Mの方が動揺したように見えた。その時の事を学生Mは「私が手帳を持ったのは高校3年生の時なので、周りの人にあまり話すことがありませんでした。他の人に手帳を見せるときは、私自身も緊張します。H子ちゃんにみ

んなの前で私も一緒だよねと言われたときは、少し戸惑ってしまいました。」とメールで伝えてきた。突発的な出来事だったが、H子が自然に自分の障がいのことを話したので、他の子たちも事実として受け入れて行くのが感じ取れた。Mがそこにいなければ、H子のこの受け答えはなかっただろう。

子どもたちは自分たちだけで新幹線に乗って出かけることを楽しみに、今までにない真剣さで準備を進めていた。前年度同様、徒歩10分ほどの場所にある仙台市男女共同参画推進センター「エル・ソーラ」を借りてお弁当を食べることにしていた。会場使用の依頼もメンバーで行くことになっていたが、「早く頼みに行かなきゃ、今から行こうよ。」と促されて行くほど、H子の行動は積極的になっていた。前年度との違いに驚く。このH子の変化は、「さわやか相談員」⁴⁾も気が付いており、以下のように筆者に話している。「夏休み直前だったと思うんだけど、みんなの前で装具を付けるのを初めて見たので驚いた。プールの後、H子ちゃんたちが図書室に来ていて、椅子に腰かけて髪を乾かしたりしている中でごく自然に装具を付けていた。H子ちゃんは図書委員なのでよく図書室にいるし、他の子が入らない図書準備室にもふだんからよく入って来る子なの。……みんなと違うことをするのは他人から見えない所するんだという先入観があったからかもしれないけど、装具も準備室でつけるものと思ってた。だからその変化には驚いた。いつもは麻痺のあるほうの手をさりげなく隠しているしね。装具や手帳を他人に見せるということは、ありのままの自分でいいと思えるようになったよい方向への変化・進化だと思う。」Mとの出会いをつうじて、ありのままの自分に自信を持ち、行動を変化させていったのだろう。前年度は包丁は持てないと言っていたH子だが、今年のかぼちゃの煮つけを担当していた。切るのは無理かと思われたが、「かぼちゃもいくつか切ってもらおうと、一人でばちんと切れることが分かった。」と、調理当日は嬉しそうにかぼちゃを切っていた。

年度末に心配されたA子も、週に何回か遊びにやっけてきている。コミュニケーションに障がいのあるY太や、同学年の子となかなか遊べないC子たちは、お店

やさんごっこや鬼ごっこをしてくれるA子が来るのを楽しみにしている。A子は切り絵を下級生に教えることが楽しく、切り絵教室をすつと言つて自作のポスターを「夢工房」に貼り出した。活動の日程や場所などが入ったポスターには「弁当酢」の影響が見られた。さらに、「弁当酢」がパソコンソフトでポスターを作るようになると、切り絵教室のポスターもパソコンで作りたいと言いつ出した。A子の家にはパソコンはないが、是非作らせてやりたい。借りた本が期限になかなか返せない、学級ではなかなか仲間に入れてもらえないなど課題の多いA子だが、「夢工房」では待つてくれている人がいるためか、やりたいことが次々生まれてくる。

宿題をやりに来るTは、今も時々やっけてきて自分ペースで過ごして行く。スタッフも特に声をかけずに離れてその様子を見ている。自閉症のA美は、「遊ぶ。」と言つ母親に告げると、小さなオセロ盤を出して来る。白黒のコマを敷き詰めて眺めては崩し、また敷き詰めては眺め、そこにできる白黒のデザインを楽しんでいる。A美も昨年とは違つ遊びを見つて出している。

学童保育の迎えまで過ごすMは、下級生に時々遊びを教えている。たまに今日は家に帰ると言つて、学童保育に行かず下校時まで楽しそうに遊んで行く日がある。学童保育の迎えが来ててもなかなか帰つたがらなかつた下の学年の2人も、学童保育の迎えの時刻を遅くしてもらつて、ゆつくり「夢工房」で遊ぶことがある。親と相談して自分ペースの時間配分ができるようになったようだ。

落ち着きがなくて針を持たせない方が良いと言われていたDも、1人で静かに手提げ袋を縫いつ上げている。ポケットもボタンもボタン穴も付いている。お人形作りに発展した子たちは、人形を使つてお楽しみ会で人形劇をすることになり、背景に使う絵を描いつていた。その傍らではまた1年生が玉結びを教えてもらつている。同じ光景のようでありながら遊びの種類は増え続け、教える立場に立つ子どもも確実に増えている。

自閉症のA美の母親は、「夢工房」を次のように評している。「夢工房は、授業が終つたあと気の向くままにフラ〜つと訪れて、干渉されず、かといつて放つ

4) 仙台市教育委員会が実施する学校生活における教育相談事業「スクールハートケア事業」の1つとして、市内小学校10校に配置されている相談員。

ておかれもせず、人（お友だちだったりスタッフだったり）との心地よい距離感を保ちながら、好きなことができる場所だと思います。一緒に何かしようとしても、どうしても『やらされて』しまう感じになるA美には『自分の気持ちのまま』過せる数少ない貴重な場所です。何より夢工房に来てる子、覗いていく子はみんな夢工房が大好きなんだなあと見ていて思います。夢工房で、学校の友だちや先生ともまた違ういろいろな大切な出会いがあるような気がします。教室ではあんまり遊ばない子とも夢工房では遊べたりして。」
(2006年9月の筆者へのメール)

4 人としてのつながりが広げる活動

(1) 居場所としての意義

子どもたちひとりひとは、いろいろな生活を背景に持ち、いろいろな想いを抱いて「夢工房」にやってくる。しかし、彼らはその想いを言葉で表現しきることができない。言葉で表現できないことは表情や行動で示している。この言葉にならない表現や言葉の向こうに隠れてしまった本当の気持ちを読み解くことは、発達のしかたも経験の蓄積も一人ずつ違う子どもたちとそれぞれ個別に向き合わなければ難しい。そのためには継続的な関係がどうしても必要であると「夢工房」のスタッフは実感している。その子の課題を解決するためにその子のための解決法を探すこと、それは子どもにとってそのおとなが「自分と関係のあるおとな」になることである。自分の力だけでは解決できないこと、うまく表現ができないことが汲み取られたとき、相手への信頼が生まれ、子どもはありのままの自分を伝えることができるようになるのではないだろうか。さらにそこで得たサポートで自分が何か成し遂げることができたとき、それが大きな自信になって行くのだ。落ち着いたDが作品を縫い上げた達成感も、「弁当酢」がイベントを成功させた達成感もそれぞれの自信になっている。その自信こそが子どもの「楽しさ」につながっている。

継続性と同時に、さまざまな人と出会うこともまた必要である。H子と学生Mとの出会いは偶然ではあるが、かけがえのない出会いになっている。それぞれのおとなの持つ経験や価値観の違いの中で、自分にとっての特別な人との出会いを子どもはさがしている。子

どもたちがその日のスタッフを見て遊ぶかどうかを決めているのも、その表れだろう。いろいろな価値観の人と出会える場所が特別な人と出会うチャンスを増やすのであるなら、それもまた居場所にとって必要な要素であるだろう。

(2) 学校の論理、地域の論理

「夢工房」のスタッフは、どのようなルールを設けるのかどうか悩みながら活動を行っている。「安全な範疇」という条件の下で禁止事項はほとんどないが、「安全」の捉え方がスタッフ・実行委員ひとりひとり違うため、指針はあっても厳密な行動規制はしていない。窓際の腰の高さの棚に座ることが危険と思うかどうか、答えはばらばらだ。同じ道具の使用でも、道具に熟練したスタッフと不慣れなスタッフでは当然危険の度合いが違う。まして子どもどうしの遊びのルールは子どもたちが作るものであり、その場その場で変化していく。すべてのルールは日々変化していくものであり、そのつど話し合いが必要であるという受け止めがなければ、毎日入れ替わるスタッフと子どもたちの関係は成り立たない。スタッフごとの捉え方の違いがあるからこそ、なぜそうなのか説明が必要になる。

ここには、学校が集団を指導する際に、時や人によって方針がぶれないよう統一性を保とうとするのとはまったく違うしくみがある。学校が定まった目標に向けて運営されているのに対し、「夢工房」は集まって来る者それぞれが違う目的で来ているが、自然と関係を作りつつひとつの空間を共有しているという違いである。いろいろな価値観を持つ人がいるという前提で再びコミュニティを形成しようとしている地域社会の論理が「夢工房」にあるといえるだろう。集団下校の際に校庭に取り残されていた子がいたように、学校や施設の規則・原則の間には「あるはずがない」「あってはならない」状況に取り残された子どもたちがいないだろうか。原則の中には常に例外は存在する。その例外を埋めて一人ひとり違いをもつ子どもに寄り添うためには、多様な価値観を前提とした地域の存在が必要になっているのではないだろうか。そこにこそ「夢工房」の存在の意味があるというのが、活動の中で筆者がたどり着いた考えである。

II

1 「夢工房」の活動風景から

地域子ども教室「夢工房」の活動は、特に目立った特徴をもたない日常風景のように、ごくさりげない形で展開されている。多くの参加者を呼び寄せる華々しいイベントを前面に出すのではなく、放課後に誰もが立ち寄り気ままに時を過ごせる「居場所」を継続的に提供しようというのが、実行委員やスタッフの意向である。

とはいえ、この活動がめざしているのは単なる空間の提供だけではない。そこに立ち寄った一人ひとりの子どもに応じて、時には距離を置いて見守り、時には近づいて寄り添うなど、スタッフの関わり方は自由自在である。複数のスタッフの間に見事な連携ぶりは、活動を離れての綿密な打ち合わせときめ細かい配慮に裏打ちされている。実際、月1回の定例的な会合に加え、日誌の蓄積やメーリングリストの活用によって、あるスタッフが見つけた課題は即座に他のスタッフへと伝達され、提案された多くの解決策をもとに次への対応方針を決めるというシステムが確立している。このシステムがあるからこそ、厳格なルールを設けて一律に行動を規制するのではなく、一人ひとりの子どものその時々の変化にきめ細かく対応することが可能になる。

スタッフの中には教職志望の大学生も多いが、その専門を生かして子どもを教え導くことが特に期待されているわけではない。逆に子どもがスタッフに何かを教える場面も多く、人生の道筋を少し先行する者と後に続く者との間の、ごくさりげない関係であるように見える。少なくとも、両者の関わりは一方的な“教育する－される”関係にはあてはまらない。学区との直接のつながりをもたない学生スタッフや、在校生・卒業生の保護者を含めた地域住民のスタッフなど、子どもに対する思いや理解のしかたはさまざまであるが、この多様性が原動力となって「夢工房」の活動の豊かさが生み出されているといえるだろう。

その豊かさとは、1つには、多様なスタッフが「夢工房」に持ち込んでくる世界とのつながりである。日ごとに入れ替わるスタッフは、子どもとの関わりを生業としているわけではなく、各自が固有の世界をもつ

て生きる存在である。スタッフが背景にもつ世界とつながる「夢工房」は、子どもたちをさまざまな人との出会いや活動に結びつけている。「THE☆弁当酢」や「チェリーブロッサムズ」の活動に見られるように、「夢工房」はその時間や場所を超えた新たな世界と子どもたちが出会うためのプラットフォームとなっている。

もう1つの豊かさは、学校や家庭のような限定された人間関係にも、学習塾や習い事など一方的に提供されるサービスにも還元されない、多種多様なスタッフとの不安定で流動的な関係がもつ価値である。参加も退出も自由な「夢工房」は、けっして子どもたちに新たな人間関係を押しつけることがない。このような関係の継続的な積み重ねの中でこそ、子どもは自分のペースで友だち・教師・家族など周囲の他者との関わりかたを解きほぐし、新たな世界を築いてゆくためのきっかけを得ることができる。

こうして考えてみると、「夢工房」の活動の意義を把握するためには、限られた時間・空間とそこに立ち寄る子どもたちだけに視線を向けるのでは十分ではない。他の子どもや教師・親などのおとな、さらには地域のあり方にまで視野を広げて、その意義を考えていく必要があると思われる。以下、(1)地域のあり方と(2)子どもとおとなとの関係に焦点をあてながら、子どもの「居場所」がもつ豊かな可能性の一端を明らかにしてみたい。

2 子どもの「居場所」をめぐる問題構成

(1) 地域観の問い直し

教育をめぐる議論における〈地域〉はしばしば、複雑多岐にわたるその内実をごく限られた角度からのみ描き出した表象として用いられる。

たとえば、悪意に満ちた不審者との遭遇など、犯罪に巻き込まれかねない危険に満ちた空間として〈地域〉が語られるケースがある。どのような活動であれ“安全・安心”をめざすことは重要であるが、このような防犯上の問題は教育そのものに関わるというよりは、むしろ教育を成立させるための前提として解決されるべきであろう。このような“安全・安心”の過度の強調は、教育問題を学校や家庭に囲い込むことで状況の行き詰まりを覆い隠し、各種教育関係者の役割を温存

しようという苦肉の策であるように見える。

その一方で、たとえば“学校・家庭・地域が一体となって教育に取り組むべき”といわれるように、さまざまな成員が一丸となった“善意の共同体”として〈地域〉が語られる場合もある。このような理解はある種の教育の理想像と見なされることもあるが、別の角度から見れば価値観の違いを受け入れない息苦しさを感ぜさせるのも事実である。しかも、このような理解は学校や家庭と〈地域〉との間に存在する解消しがたい差違を捨象したところに成立しており、二重の意味で問題を含んでいるといわざるをえない。

いずれの理解も、悪意にせよ善意にせよ一面だけを極端に強調しているが、実際の地域は両者の間に存在するように思われる。善意と悪意とが容易には識別できない形で混在した、可視と不可視の入りくんだ空間として、地域を考えてみる必要があるであろう。「郊外化」現象を考える際に宮台真司(1997)は、旧来の共同体的イメージの中に押し込める形で「地域」をとらえる一方、家庭・学校・地域のいずれからも解放されたコンビニや街(ストリート)などの都市的現実を「第四空間」として描き出した。「郊外化」の進行は現在の地域を理解する上で重要な論点であるが、空洞化の進んだ共同体的な「地域」と情報空間を含めた「第四空間」との峻別はあくまでも理論上の問題である。現実の地域は、あくまでも両者の混在状況としてとらえなければならない。

多種多様な人や組織が混在し、刺激に満ちた情報や文化が飛び交う場として地域をとらえることによって始めて、いわゆる「地域の教育力」が学校や家庭の教育機能とは異なる独自の意義をもつと認めることができる。これは、広田照幸(1999, p.21-22)が述べるように、子どもが地域から受けるさまざまな影響力を「社会的に是認されるもの、望ましいもの」だけに限定せず、「望ましくない側面」も含めてとらえようとする態度をとることを意味している。「届け出や準備など必要とせず、子どもがその気になったときに、そこに行けばいつでも誰かと出会うことができ、やりたいことがあれば、そこですぐにやれるような場所」(門脇, 1999, p.188)の存在意義は、このような観点から理解することができるのである。

(2) 子どもの「育ち」とおとなの役割

子ども・若者の「育ち」のプロセスの追究は、教育と福祉という2つの領域にまたがる学際的な活動の中で、近年めざましく進んでいる(小木ほか, 2000; 2002; 2005; 日本社会教育学会, 2002)。教育の立場から見ると、成人に向けての長期を見据えた“指導”という従来の取り組みがしだいに有効性を失ってゆくという状況があった。そのような中で子どもや若者の現在に目を向け、興味関心や抱えている問題の異なる多様な個人や集団を受け入れる空間としての「居場所」の整備が教育的な課題となってきた(田中, 2001)。2つの領域の間に生じた競合状態の克服に向けて、両者の協働体制の構築をめざすケースも現れてくるなど、今後も実践的・理論的な発展が見込まれる。

もともとは「子育て」というように他動詞「育てる」を含んだ表現が用いられてきたところに、自動詞「育つ」を含む「子育て」という表現が後から生まれてきたということになる。「子育て」という場合の子どもは一方的に教え導かれ、特別の保護・配慮や管理を受ける対象ととらえられる面もあるが、これに対し、子どもが自ら生を育む主体であることを強調するのが「子育て」の視点である(このような力点の移動は、教育をめぐる議論が教育から学習、さらには“学び”へと関心を移しつつある状況と並行していると考えられる)。

子どもの「育ち」の支援にあたっては、教員だけでなく社会教育主事・児童指導員・保育士や各種団体等の指導者を含めた専門的職員の存在が依然として重要であるが、特に近年は専門的な職員の確保が厳しい状況にある。その意味では、特定の職業に限定されないごく普通のおとなが子どもを側面から支援する(見守る)という活動の意味は、今後よりいっそう重要になっていくと考えられる。ただし、子どもの「育ち」を目的とした特別な配慮をおとなに求めるというだけであれば、〈教師-児童・生徒〉・〈親-子〉という“教育的”な〈おとな-子ども〉関係と何も変わらないことになる。おとなの学びや生活そのものにとって、子どもとの関わりをもつことがどのような意味をもつのかについて、さらに掘り下げてとらえてみる必要がある。

学習者としてのおとなの特徴に注目する時、子どもとの関わりは、おとなの認識の「剛構造」(碓井, 1977)の殻を破るきっかけの一つになると考えること

ができる。親あるいはおとなの立場から生まれる“子どものために”という思いが、通常は“当たり前”とやり過ごすような認識のあり方を改めて見つめ直し、自分ひとりでは逡巡してしまう新たな行動へと足を踏み出していくことにつながると期待される。

では、子どもとの関わりがなぜおとなにそのような影響を与えるのか。広井良典（2006）が人と人とのつながりの根底をなす次元に位置づける「スピリチュアリティ」（p.235）は、このことと深く関わっている。おとなにとって子どもは、自らの生を終えた後の時代を生きる存在である。そのような子どもと関わることで、おとなは生と死を超えた認識を獲得することが可能になるというのである。そしてこれは、一種の“聖なる存在”としての子どもの中に、「あらゆるものに生命を吹き込み、あらゆるものに形象を与えてゆく力」を見いだしたフレーベル（1961, p.119）とさほど遠くない地点を指し示しているといえる。

子どもとともに生き、子どもたちの声に耳を傾けることが、おとなの生の充実につながっていく。このような考え方の中でおとなに期待されるのは、子どもを見守り支援する役割だけでなく、おとなが自ら社会の一員として生きることである。子どもや若者に対して高い立場から支援を申し出る「ウザイ」態度を捨て、「ただシンプルにともに暮らし、ともに生きる場」（西野, 2006, p.171）をつくろうとする姿勢がおとなに求められる。子どもの育ちがおとなを巻き込む中で、一人ひとりのおとなが“元気”になり、そのことが地域社会の活性化を促していく。このようなビジョンのもとでこそ、子どもの育ちを地域が支援する仕組みがもつ意義を理解することができるのである。

3 子どもの「居場所」の将来展望

「地域子ども教室推進事業」は、2004（平成16）年度から文部科学省が3年間にわたって実施している事業である。活動は全国で約10,000ヵ所にわたり、行政・学校教育・PTA・各種団体の関係者等が組織する運営協議会が主体となって「安全・安心な子どもたちの居場所（活動拠点）」を設けることで、「地域の教育力の再生」をめざしている。

「地域子ども教室」はその名称にも現れているように、学校的な性格（「教室」）と非・学校的な性格（「地

域」）とが混ざりあっているといえる。地域における各種団体の力を集めることを期待しつつ、事業展開においては活動日数の確保や指導員の位置づけなど学校的な性格も強いように見受けられる。事業終了の翌年度（2007年度）からは、「放課後児童健全育成事業」（厚生労働省）と統合され、「放課後子どもプラン」（仮称）が開始される予定である。この移行は、すべての小学校区（約20,000ヵ所）で実施するといわれるような規模の拡大だけでなく、質的な変化が生じることも予想される（事業の名称にも現れているように「地域」の性格が後退して、より「学校」的な方針へと移行することも考えられる）。

たとえば学校選択制の問題にしても、子ども・保護者・学校・行政の立場だけで進める議論は、結果として地域と学校とのつながりを断ち切る方向へと向かっていく。複雑な地域の現実が教育に与える影響は、統計調査等によって操作的に理解することが難しいのも事実である。しかし、現在の教育および教育学が陥っている行き詰まり的な状況は、むしろ操作的な理解が困難な要素から目を背けてきたことの帰結ではないだろうか。目まぐるしく流れゆく現象に振り回されずに教育の本質を追究しようとするのは容易ではない。

このような状況の中で、「夢工房」の活動の中長期的な将来展望を描くことは難しいが、地域における生活に根ざした「子育て」環境の改善の取り組みは、行政による支援や活動資金の補助などの条件に左右されずに継続されてゆくのではないかと考えられる。「夢工房」のこれからの活動に期待したい。

（本稿はⅠを池川、Ⅱを梨本が分担して執筆をおこない、その上で全体に修正を加えたものである。）

文 献

- 碓井正久「社会教育の方法考察のための前提的視点」碓井編『社会教育の学級・講座』亜紀書房, 1977, pp. 3-23
- 小木美代子・立柳聡・深作拓郎編『子育て学へのアプローチ』エイデル研究所, 2000.
- 小木美代子・姥貝荘一・立柳聡編『子どもの豊かな育ちと地域支援』学文社, 2002.
- 小木美代子・立柳聡・深作拓郎・星野一人編『子育て支援の創造—アクション・リサーチの実践を目指して』学

- 文社, 2005.
- 門脇厚司『子どもの社会力』岩波書店, 1999.
- 田中治彦『子ども・若者の居場所の構想—「教育」から「関わり」へ』学陽書房, 2001.
- 西野博之『居場所のちから』教育史料出版会, 2006.
- 日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育—自己形成の場と関係性の変容—』東洋館出版社, 2002.
- 広井良典『持続可能な福祉社会—「もうひとつの日本」の構想』筑摩書房, 2006.
- フレーベル『人間の教育 (上)』荒井武訳, 岩波書店, 1964.
- 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ』講談社, 1999.
- 宮台真司『郊外化と近代の成熟』『まほろしの郊外—成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社, 1997, pp.128-152.
- 矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部, 1995.

(平成18年9月29日受理)